

パニウム — 第二十三番

その同盟の後、彼は欺いて事を行う。

Jeff Pippenger

2026-03-20

ダニエル11章24節は、異教ローマが至高の支配を行う期間を、「時」という語によって示している。預言的適用において、一つの「時」は360年を表し、その年数は、古代史上最も著名な海戦、すなわち紀元前31年のアクティウムの海戦において始まった。これより規模が大きく、戦略的にもさらに洗練された海戦は他にも存在したが、アクティウムは、マルクス・アントニウスとクレオパトラとの結び付きによって、最も象徴的な海戦であった。これは、ダニエル11章40節の成就としてのベルリンの壁の崩壊、また黙示録18章の成就としての9・11におけるツインタワーと同様に、歴史的意義において比肩し得るものである。というのも、神が御自身の預言の言葉を成就させる歴史的出来事を選ばれるとき、神は常に、可能な限り最も多くの人々の注意を引く仕方でそれをなさるからである。

彼と同盟が結ばれた後、彼は欺きをもって事を行う。彼は進み上って来て、少数の民によって強くなるからである。彼は安らかに州の最も肥えた地にまで入り、その先祖たちも、その先祖たちの父祖たちも行わなかったことを行う。彼は分捕り物と略奪物と財宝を彼らの間に分け与える。しかも彼は要害に対してその策略を巡らすが、それもただしばらくの間である。ダニエル 11:23, 24.

ウリア・スミスは、第二十三節におけるローマとマカベア人との同盟についての考察を、その節の「少ない民」に言及しつつ締めくくっている。

「この時、ローマ人はまだ小さな民であり、その語の意味するところによれば、欺きをもって、あるいは狡猾さをもって行動し始めた。そしてこの時点から、彼らはその後到達することになる権力の頂点へと、着実かつ急速な上昇をもって進んでいった。

「 [二十四節引用.] 」

「ローマ以前の時代に、諸国民が価値ある州や豊かな領土へと入り、それを獲得する通常の方法は、戦争と征服によることであった。ところがローマは今や、父祖たちもその先祖たちも成し得なかったこと、すなわち、これらの獲得物を平和的手段によって受けることを行うのであった。以前には聞かれたことのなかった慣行、すなわち王たちが遺贈によってその王国をローマ人に残すということが、今や始められた。ローマはこの方法によって広大な州を領有するに至った。』

「そして、このようにしてローマの支配下に入った者たちは、そこから少なからぬ利益を得た。彼らは親切と寛容をもって扱われた。それは、獲物と分捕り物とが彼らの間に分配されるようなものであった。彼らは敵から守られ、ローマの権勢の庇護のもとにあって、平和と安全のうちに安んじた。

「この節の後半について、ニュートン主教は、要害に対してではなく、要害から策略を予告するとの考えを示している。ローマ人はまさに、七つの丘を有する彼らの強固な都の要塞からこれを行った。『しばらくの間』とは、疑いなく預言的な一時、すな

わち三百六十年である。これらの年数は、いかなる時点から数えられるべきであろうか。おそらく、次の節に示されている出来事からである。」Uriah Smith, Daniel and the Revelation, 272, 273.

スミスは論を進め、紀元前31年のアクティウムの戦いをその三百六十年の起点であると特定する。第二十五節を引用した後、スミスは次のように述べる。

「第23節および第24節によって、われわれは、ユダヤ人とローマ人との同盟、すなわち紀元前161年よりこちら側へと導かれ、ローマが普遍的支配権を獲得した時代に至る。いまわれわれの前にあるこの節は、南の王、すなわちエジプトに対する強力な遠征と、巨大にして強勢な軍勢同士の間で行なわれた注目すべき戦いの出来事を示している。このような出来事は、ちょうどこの頃のローマの歴史において実際に生じたのであろうか。——まさしく生じたのである。その戦争とはエジプトとローマとの戦争であり、その戦いとはアクティウムの戦いであった。この衝突へと至らせた諸事情を、簡潔に見てみよう。」

「[マルクス]アントニウス、アウグストゥス・カエサル、およびレピドゥスは、ユリウス・カエサルの死に復讐することを誓った三頭政治を構成した。このアントニウスは、アウグストゥスの妹オクタウィアと結婚することによって、アウグストゥスの義弟となった。アントニウスは公務でエジプトへ派遣されたが、エジプトの放蕩な女王クレオパトラの術策と魅力の犠牲となった。彼が彼女に対して抱くようになった情欲はきわめて強烈であったため、ついにはエジプトの利益に与し、クレオパトラの歓心を買うために妻オクタウィアを退け、その貪欲を満たすために次々と属州を彼女に与え、ローマではなくアレクサンドリアで凱旋式を挙行し、その他にもローマ人民を甚だしく侮辱したので、アウグストゥスはこの祖国の敵に対する戦争へ彼らを熱心に導き入れることに何ら困難を覚えなかった。この戦争は表向きにはエジプトとクレオパトラに対するものであった。しかし実際には、今やエジプト政務の長として立っていたアントニウスに対するものであった。そして、彼らの争いの真の原因は、プライドが言うところによれば、両者のいずれもローマ帝国の半分だけでは満足できなかったことにある。というのも、レピドゥスが三頭政治から失脚させられたため、それは今や彼ら二人の間に帰することとなり、しかも各々が全体を所有しようと決意していたので、その支配権を得るために戦争という賽を投じたのである。」Uriah Smith, Daniel and the Revelation, 273.

預言的観点からすると、アクティウムの戦いは日曜法を示している。というのも、それは、スミスが述べるところの異教ローマの「普遍的支配」を確立した三つの地理的障害のうち、第三の征服を表していたからである。異教ローマの場合と同様に、教皇制ローマの第三の障害がローマ市から駆逐されたとき、教皇制ローマの「普遍的支配」は538年に始まった。これら二人の証人は、現代のローマが聖書預言における第六および第七の王国の両方を打ち破り、そのことによって第三の障害をも打ち破って、象徴的な四十二か月の間の「普遍的支配」を確立する、その場所と時における日曜法を扱っている。

また、彼には大言壮語と冒瀆とを語る口が与えられ、さらに四十二か月の間、活動する権威が与えられた。黙示録 13:5

エジプトに敵対するローマ

ローマのアウグストゥスによるエジプトおよびクレオパトラに対する戦争の預言的力学は、マルクス・アントニウスの反逆によって駆り立てられたのであり、その預言的力学は、預言的必然性によって、日曜法において表される預言的力学を表象しなければならない。

アクティウムにおいて、ローマはエジプトを征服したが、その勢力は反逆的な男と不聖な女との同盟から成っていた。アントニウスとクレオパトラの同盟は、教会と国家の結合である。アクティウムにおいて、アウグスティヌスのローマは、教会と国家との不聖な結合によって表される勢力を征服した。

獣の像

クレオパトラは、ローマの象徴であるアントニウスと結び付いた、墮落した教会を表している。ユライア・スミスが、アントニウスは「エジプトの放蕩な女王クレオパトラの術策と魅力の犠牲となった」と述べたように、クレオパトラは彼らの関係における支配者であった。アントニウスとクレオパトラによって表される政教同盟は、クレオパトラをその関係を支配する勢力として示していた。したがって、彼らの関係によって表される教会と国家の結合は、獣の像の定義——すなわち、その関係において女が支配権を握る教会と国家の結合——に合致する。アクティウムは、まもなく到来する日曜休業令を予型していた。

アウグストゥスは、間もなく到来する日曜法において合衆国を征服する教皇権を表している。マルク・アントニウスは地の獣の共和党の角であり、クレオパトラはプロテスタントの角である。アントニウスとクレオパトラは、間もなく到来する日曜法において結び合わされ、竜のように語る。クレオパトラとアントニウスの両者はともに竜の力の象徴であり、彼らが日曜法において完全に結合するとき、彼らは竜のように語る。

竜たち

ギリシアとエジプトは、預言的にはいずれも竜の勢力を表しており、またアントニウスもまた竜の勢力を表していた。エジプトはダニエル書十一章における南であり、ギリシアは西であった。アレクサンドロスの王国が四つに分割された後、エジプトはプトレマイオス一世によって掌握された。こうしてプトレマイオス一世は、預言における最初の南の王となり、クレオパトラはエジプトにおける最後のプトレマイオス朝の支配者であった。プトレマイオスは、アレクサンドロス大王の出生地であるマケドニアに生まれた。

マケドンはギリシア北部にあり、その祖先の起源はギリシア神話の英雄たちに由来すると主張していた。南部ギリシアの都市国家は、マケドニア人を南部ギリシアのヘレニストたちよりもいっそう野蛮であると見なしていた。マケドニア人は君主制であり、これに対してアテネ、スパルタ、テーベ、コリントスなどの南部の都市国家（ポレイス）は、南部・中部ギリシアおよびエーゲ海の島々に存在していた。これらのポレイスはしばしば民主政、寡頭政、あるいは混合政体を有していたが、マケドンは強力な王朝（アルゲアス朝）を擁する中央集権的な君主制であった。それでも、彼らはみなヘレニストであり、ローマが歴史に登場した時、ローマ人はヘレニストたちをギリシア人と呼んだ。クレオパトラは最後のプトレマイオス朝の支配者であり、これはマケドン、すなわちギリシア北部

の地域に由来する、北の王国の君主制的なギリシア人の部族を代表していた。

南の王

クレオパトラは、アレクサンドロスの王国が四つに分裂したときにプトレマイオス一世によって始まったプトレマイオス朝の最後の統治者であった。アクティウムの戦いにおいて、文字どおりの南の王であるプトレマイオス朝は終焉に達した。次の南の王は霊的なエジプトであり、フランス革命の歴史においては無神論的フランスによって表された。

そして、彼らの死体は大いなる都の大通りにさらされる。その都は、霊的な意味においてソドム、またエジプトと呼ばれる所であり、そこはまた、私たちの主が十字架につけられた所でもある。黙示録 11:8。

文字どおりのエジプトは、アレクサンドロスの王国の分裂との関連において、文字どおりの南の王であった。しかし、霊的なエジプトが南の王として表されるのは、文字どおりの方角によるのではなく、エジプトの預言的屬性によるのである。

南と西

クレオパトラはその王国における最後のプトレマイオス朝の支配者であったが、預言的にはギリシア（西）とエジプト（南）という二重の勢力であった。これに対し、その次の、そして霊的な南の王はフランスであり、これもまた黙示録第十一章においてエジプトとソドムとして表される二重の勢力であった。ソドムの淫逸は西のクレオパトラの淫逸と符合し、南のクレオパトラはエジプトの無神論と符合する。文字どおりの最後の南の王の二重の性質は、最初の霊的な南の王と一致していた。

アクティウムの戦いは、アントニウスのローマの竜と、クレオパトラの南と西の竜との不聖なる同盟であった。アントニウスとクレオパトラは教会と国家を表しているので、ローマのアウグストゥスによるアクティウムの征服は、獣の像を予表する不聖な二重の結合に対してローマが打ち勝つ征服を表している。三百六十年後、ダニエル11:24の成就として、コンスタンティヌスはローマを東西に分割し、ローマの女を西に残し、ローマの男を東へ移した。アクティウムの戦いにおいて、南と西の征服は、三百六十年という「時」の後に起こる東西の分割を予表していた。さらにそれ以前の対立においては、アントニウスに東ローマが与えられ、アウグストゥスには西が与えられていたので、アクティウムは東と西を一つにしたが、それもただ「時」の間だけであった。

紀元前31年と330年

イエスは常に終わりを初めによって例証されるので、紀元前31年のアクティウムの征服は、330年における帝国の東西分裂を予表する。紀元前31年のアクティウムは、330年に完結した360年の期間におけるオメガのアルファであった。紀元前31年と330年は、いずれもダニエル11章16節および41節に示されている、まもなく到来する日曜法を予表する。

もう一つの象徴

南と西のクレオパトラと結び付いたローマのアントニウスは、獣の像の二重の連合の内にある三重の同盟を表している。十字架もまた日曜法と一致しており、したがってアクティウムおよび330年とも一致している。十字架においては、ユダヤ人（墮落した教会）がローマ（国家）と結び付いてキリストを殺害したことにより、教会と国家の二重の連合が表されている。その十字架における連合の第三の当事者は、偽キリストであるバラバによって表されており、その名は「父の子」を意味する。バラバは、真の預言者としてのキリストと対比されるとき、象徴的に偽預言者である。ローマはアントニウスであり、南と西のクレオパトラはユダヤ人とバラバを表していた。

十字架はまた、カルメル山におけるエリヤにも対応している。そこでは、だれが真の預言者であり、だれが偽りの預言者であるかをめぐって選択がなされた。そのときの偽預言者は、バアルの預言者たちとアシェラの祭司たちから成る二重の象徴であった。バアルは男性の神であり、アシェラの祭司たちは女性の神アシュタロテを表していた。十字架においては、ユダヤ人が女性の神アシュタロテであり、悲しみの人の偽造であったバラバは男性の神バアルであった。

クレオパトラは、南の女王であると同時に、西の女王でもあった。アントニウスはローマの像であり、ユリウスの暗殺に報復することを誓った三重の三頭政治の一部であった。ユリウスが二十三の傷によって死んだことは、ダニエル書第十一章四十節の成就として、一七九八年における教皇制の致命的な傷を表していた。アクティウムにおけるアウグスティヌスは、その致命的な傷の癒やしを表している。アントニウスとクレオパトラが死ぬとき、その傷は癒やされる。アントニウスとクレオパトラは、合衆国における獣の像を表しており、それは地の獣とその二つの角から成る、三重の預言的実体である。アントニウスはその一部分であり、クレオパトラは他の二つの部分を表している。それがアントニウスのローマであれ、あるいはクレオパトラのエジプトとギリシアであれ、聖書預言の第六の王国が終わる日曜法の時に、彼らは共に死ぬ。預言的に言えば、アントニウスに対するクレオパトラの関係は、教会的策略と国家的策略との混合であり、教会的策略が国家的策略を誘惑し、支配するのである。

予表された第二の死

もう一つの預言的な水準において、クレオパトラとユリウス・カエサルおよびマルク・アントニウスとの関係は、クレオパトラの教会的策略がローマ帝国の国家的統治術と関係を結ぶ二つの時を表している。彼女は、ダニエル書十一章四十節の成就として、その最初の象徴的な死である一七九八年にユリウスによって見捨てられた。そしてその後、ダニエル書十一章四十五節の成就として、アクティウムにおいて、助ける者が一人もなくその終わりに至る。四十節は、いやされるべき彼女の最初の致命的な傷のアルファであり、四十五節のオメガは、彼女が第二の、そして最終的な死を受けるところである。

第十六節から第二十二節における四つのローマの勢力と同様に、聖書的象徴としてのクレオパトラもまた、文脈に基づいて一つ以上の意味を有している。ユリウスは、王的支持が取り除かれた一七九八年に彼女を去り、その後、日曜法において彼女の致命的な傷は癒やされる。しかし、黙示録十七章の十人の王たちは、最終的に彼女が第二の、そして最後の死に至る時、火をもって彼女を滅ぼす。

クレオパトラは、ファラオのエジプトの無神論とギリシアの宗教哲学によって表される二重の性質の象徴である。彼女の二重の性質は、エジプトの国家的政策とギリシアの教會的策略を表している。ギリシアの宗教哲学は、パルテノンと呼ばれるその神殿に像として安置されたギリシアの女神アテナによって表される。アテナは知恵の象徴であり、また女性として、神的教育に対置される人間教育の宗教を表している。

アメリカ合衆国の二本の角は共和主義とプロテスタント主義であり、これらはフランスにおいてエジプトとソドムによって予表されていた。エジプトは国家的政略であり、ソドムは教會的政略である。それゆえ、共和主義はエジプトに対応し、プロテスタント主義はソドムに対応する。共和主義はエジプトであり、プロテスタント主義はソドムでありギリシアでもある。人間的教育の象徴はギリシアの女神アテナであり、その神殿はパルテノンであって、現代におけるその対となるものはテネシー州ナッシュビルのパルテノン神殿である。アメリカ合衆国において日曜法の時に共和主義の角と結びつく腐敗した教會の象徴は、クレオパトラ、アシュタロテ、サロメ、そしてソドムとして表される。

クレオパトラは、ファラオの無神論とギリシア人の宗教を描写している。無神論という哲学に伴う宗教は、ギリシア的教育の礼拝である。イエスは常に終わりを初めによって示されるが、園の中にあって食べることを禁じられていた木は善悪の知識の木であり、それは、シスター・ホワイトが「高等教育」と呼ぶギリシア哲学の宗教を予表していた。それは、キリストとサタンとの大争闘において、クレオパトラのギリシア的な知恵の宗教が、真の教育の墮落した偽物であることを明らかにし、強調している。

テネシー州ナッシュビルは「南のアテネ」と呼ばれており、クレオパトラは文字どおりの最後の「南の女王」であった。最後の南の女王は、次に来る最初の靈的な南の王を予型しており、それは無神論的フランスによって成就された。無神論的フランスは、テネシー州ナッシュビル、すなわち「南のアテネ」において、女神アテナのためのパルテノン神殿が象徴的に表されているアメリカ合衆国を予型している。その神殿はナッシュビルのウエスト・エンド2500番地に位置している。二十五という数は、マタイ二十五章の三つのたとえにおける閉ざされた戸を表している。クレオパトラは「南」と「西」の女王として、南のアテネにおいて自らの「終わり」に至る。

アクティウム、クレオパトラ、アウグストゥス、アントニウスに関するこれらの考察を踏まえて、私たちはダニエル書第十一章二十四節から三十節に立ち返る。おそらく、この箇所のもっと曖昧な部分は、「彼らが一つの食卓で偽りを語る」と述べられているところである。

そして、この二人の王の心は悪事を行うことに向けられ、彼らは同じ食卓に着いて偽りを語る。しかし、それは成功しない。終わりはなお定められた時に至るからである。
ダニエル11:27.

その節において定められた時は三百三十であり、それは第二十四節の「時」の終わりである。その定められた時は、アメリカ合衆国における日曜法を表すとともに、世界に対する人類の恩恵期間の終結をも表している。日曜法に先立って、悪を行おうとその心に定めた二人の王は、一つの食卓に着いて互いに偽りを語るであろう。ダニエル書十一章の第十六節および第四十一節の日曜法に先立って、二人の王が一つの食卓で偽りを語るが、そ

の偽りは成功しない。互いに偽りを語るその二人の王とはだれであるか。その考えに答える前に、この連続講義の中で以前すでに取り上げたいいくつかの象徴を、ここで思い起こしておきたい。

四人のローマの支配者たちは、どの文脈において考察されるかによって、さまざまな預言的象徴を表している。彼らはローマの支配者であるが、象徴としては本質的に、古代ユダがセレウコス朝の支配からローマ人の支配へと移行していった際の預言的歴史を表している。

ポンペイウスは将軍であり、その次の三人のローマの支配者はみなカエサルであった。ユリウスはアウグストゥスとの関係において、二つの三重の連合、すなわち第一の非公式の三頭政治と、第二の公式の三頭政治を代表していた。これら四人の支配者は、ある文脈においてはいずれも日曜法を表している。ポンペイウスは栄光の地を征服し、ユリウスは二十三の刺し傷によって表される者として第一の天使である。彼は最初のカエサルだからであり、また彼は第三の天使、すなわちティベリアスを予型している。十字架におけるティベリアス、すなわち日曜法もまた二十三によって表される。なぜなら、二十三は贖いを表しているからである。そして十字架は、キリストがその神性を私たちの人性と結び合わせる御業において、きわめて本質的な部分である。したがって、ユリウスとティベリアスは、二十三によって表される第一と第三のメッセージなのである。

ユリウスは、ハリウッドの伝承においてしばしば描かれるようなロマンティックな人物ではなく、権力に取りつかれた冷酷な男であった。ティベリアスはユリウスよりもさらに悪質であり、その卑劣さはまさにその節においても言及されている。というのも、ヘブライ語アルファベットの最後の文字は二十二であり、最初の文字は一だからである。アルファはオメガよりも小さく、ティベリアスの卑劣さはヘブライ語アルファベットの最後の文字である第二十二節に位置づけられている。そして、ユリウスとティベリアスによって表される二人の卑劣な人物の間には、アウグストゥスがいた。アウグストゥスは、ローマの権力と威信の栄光の絶頂を表している。第一と第三のメッセージの反対のものとして、彼は反逆の象徴である十三という文字によって表されている。アウグストゥスは、ローマ史上最も著名な反逆であるアントニウスとクレオパトラの反逆を鎮圧することによって、自らの王国を確立した。

アウグストゥスは第三の障害を征服したローマの勢力であり、そのことによって彼は日曜法を表象していた。また彼は、黙示録第十三章の反逆の四十二の象徴的な月の期間に支配するローマの勢力でもある。日曜法の前に置かれるとき、ポンペイウスは1798年であると同時に1989年でもあり、それによってポンペイウスは、219年から紀元前217年に至る第四次シリア戦争を終結させたアンティオコス大王の象徴となり、第十一章第十節の成就となる。次いでユリウス・カエサルは第十一節および第十二節、すなわち国境線の戦い、紀元前217年のラフィアの戦いと一致する。そこにおいてユリウスもまたアンティオコス大王であり、またアウグストゥス・カエサルも、第十五節のパニウムの戦いにおいてアンティオコス大王である。そして第十六節においてティベリウスは日曜法であるが、彼はアンティオコス大王ではない。というのは、そこでは彼はポンペイウスだからである。イエスは常に終わりを初めをもって例証されるからである。この節は、聖書預言の第六の王国としてのアメリカ合衆国の終焉を予型するものとして、セレウコス帝国の終焉を示

している。

四人のローマの支配者については、なおさらに対応関係を整える必要があり、その系譜は第四十節の隠された歴史を表している。第二十三節のマカベアの系譜もまた、第四十節の隠された歴史を例証している。次いで第二十四節では、異教帝政ローマの物語が一つの期間——三百六十年——によって示されている。第二十四節から第三十節に至るまで示されるローマ史の系譜もまた、第四十節の隠された歴史の例証である。それは、主題が異教ローマから教皇制ローマへと移る第三十一節において終わる。異教ローマはなおその節の中にあるが、そこでは聖書預言における第四の王国としてではなく、五三八年に教皇制を王座に就けた政治権力として表されている。五三八年に教皇制は日曜法を制定したので、第三十一節は第十六節および第四十一節と対応している。第二十四節はアクティウムの戦いと、その系譜に関わる歴史を導入した。

第二十四節は、異教ローマが三百六十年間にわたって至高の支配を開始した時を示しており、続いて第三十一節では、教皇ローマが千二百六十年間にわたって至高の支配を開始する。線の始まりと終わりには、アルファでありオメガであるキリストの署名が刻まれている。これらの節の中には、マルクス・アントニウス、クレオパトラ、そしてアウグストゥス・カエサルの歴史がある。第十六節において、異教ローマは紀元前65年にセレウコス帝国を征服し、その後、紀元前63年にユダを征服した。紀元前31年のアクティウムにおける第三の障害は、紀元前65年におけるセレウコス朝の最初の障害によって予表されていたように、エジプト王国の終焉を示した。ここでもまた、われわれは最初であり最後である方の署名を見いだす。紀元前65年は三つの障害の最初であり、それは北の王の征服を表していた。そして紀元前31年は三つの障害の第三であり、それは南の王の征服を表していた。三つの障害の中間の障害としてのユダは、ポンペイウスが紀元前63年に到着した時、エルサレムの城壁の内で内戦を行っていた。第二の障害は反逆の象徴である。

538年、教皇制ローマに対する第三の障害はローマ市から駆逐された。その障害とはゴート人であり、そこで聖書預言における第五の王国が始まった。すなわち、第四の王国が終わったまさにその場所で。しかも、第四の王国がその第三の障害において始まったのと同様に、エジプトの王国は打ち破られたのであり、それはセレウコス王国の第一の障害において予表されていたとおりであった。これは、二十四節から三十節に見いだされる預言的証言が、第四十節の隠された歴史の中にも位置づけられるべき一つの線を表していることを示している。このゆえに、マルクス・アントニウス、クレオパトラ、ユリウス・カエサル、ポンペイウス、およびアウグストゥス・カエサルによって表される種々の預言的関係を考察することが不可欠である。

それでは、彼らが一つの食卓に着いて偽りを語る時、二十四節から三十節までの本文の最も曖昧な部分はそういうことなのであろうか。

そして、この二人の王の心は悪事を行うことに向けられ、一つの食卓に着いて偽りを語る。しかし、それは成功しない。終わりはなお、定められた時に至るからである。ダニエル 11:27。

ウリヤ・スミスは、その二人の王をマルクス・アントニウスとアウグストゥス・カエサルであると特定している。

「第27節を引用した」

「アントニウスとカエサルは、かつては同盟関係にあった。しかしながいに友情の装いの下で、二人とも世界的支配を求めて野心を抱き、策謀をめぐらしていた。彼らが互いに対して示した敬意と友情の表明は、偽善者たちの言葉であった。彼らは一つの食卓で偽りを語った。アントニウスの妻であり、カエサルの妹であったオクタウィアは、アントニウスが自分と離婚した際、ローマの民衆に対し、自分が彼との結婚に同意したのは、それがカエサルとアントニウスとの結合の保証となることをひたすら期待したからにはほかならない、と述べた。しかし、その計略は成功しなかった。決裂が起こり、その後続いた争いにおいて、カエサルは完全な勝利を収めた。」ユライア・スミス『Daniel and the Revelation』276頁。

オクタウィアがアントニウスとの結婚を結合の誓約として示したとき、それは、先に第十一章において、紀元前252年ごろのベレニケとセレウコス朝の王アンティオコス二世テオスとのヘレニズム時代の結婚によって予表されていた婚姻同盟を示した。ベレニケはプトレマイオス二世フィラデルフォスの娘であった。オクタウィアとベレニケは外交的結婚を、あるいは預言的には条約を表している。第五節から第十節は、南方の王国と北方の王国との間の外交的結婚の歴史を示しており、また、マルクス・アントニウスと、後にアウグストゥス・カエサルとして知られるオクタウィアヌスとその結婚を取り決めたとき、彼らは王国を東西に分割もした。

ブルンディシウム協定（紀元前40年）は、内乱寸前にまで至った後、第二回三頭政治における緊張を解消するために、マルクス・アントニウスとオクタウィアヌス（のちのアウグストゥス）との間で交渉により成立した和解であった。その内容には、ローマの領域を分割すること（アントニウスは東方、オクタウィアヌスは西方）と、アントニウスがオクタウィア（オクタウィアヌスの姉妹）と結婚することによってこれを確定することが含まれていた。紀元前39年、当初の5年の三頭政治の任期が満了すると、アントニウスは300隻以上の船を率いてイタリアへ向かったが、当初はブルンディシウムへの上陸を拒まれたため、最終的にはタレントウムに入港した。アントニウス軍がオクタウィアヌス軍と戦うことを望まず、またその逆も同様であったことから、長期にわたる調停が実を結び、オクタウィアヌスはそこで彼と会見した。オクタウィアは重要な仲介者としての役割を果たし、アントニウスを説得して、セクストゥス・ポンペイウスに対してオクタウィアヌスを支持させた。彼らは三頭政治をさらに5年間（紀元前32年まで）更新し、アントニウスは120隻の船をオクタウィアヌスに提供し、その見返りとして約束された軍隊を受けることになった（しかし、オクタウィアヌスはのちにこれを与えなかった）。

紀元前32年、二人の敵対者の間には公然たる決裂が生じた。両者の関係は、宣伝工作、アントニウスの東方への傾斜（クレオパトラとともに）、およびオクタウィアヌスの西方における権力基盤の強化によって悪化していた。オクタウィアヌスは、アクティウム以前にアントニウスが後に提案した会談案を拒否した。

北の王（アンティオコス）と南の王（プトレマイオス）との外交結婚においては、花嫁を差し出したのは南の王であったが、アントニウス（東）とオクタウィアヌス（西）との外交結婚においては、花嫁を差し出したのは西であった。いずれの外交結婚も失敗に終わり、娘または姉妹を差し出した側が、最終的には、その条約を破った勢力に対して勝

利した。

三者の証し

セレウコス帝国の終わりにおいて、同じ食卓で偽りが語られた第三の条約があった。これは、第5次シリア戦争（紀元前202年—195年）の文脈において生じたものであり、そのときアンティオコス3世大王は、紀元前204年にプトレマイオス4世フィロパトルが死去した後のプトレマイオス朝の弱体化につけ込んだ。プトレマイオス5世エピファネス（Ptolemy V）は幼少（およそ5～6歳）で王位に就いたため、エジプトは摂政たちの統治下に置かれ、国内の混乱、土着民の反乱、そして外部からの脅威に対して脆弱な状態にあった。

アンティオコス大王は、すでにパニオンの戦い（紀元前200年）のような勝利の後、コイレ・シリア、パレスチナ、および小アジアにおけるプトレマイオス朝の領土の大部分に侵攻し、これを奪取していた。エジプトを完全に征服することは（ローマが彼に対し特定地域への不介入を迫っており、そのためローマの介入を招く危険があったので）、彼は「保護者」の立場を装う外交的婚姻同盟を追求した。紀元前197/195年、戦争を終結させる講和条約の一環として、アンティオコス大王は幼い娘クレオパトラ1世シラ（クレオパトラ・シラとも呼ばれる）を幼少のプトレマイオス5世と婚約させ、その後これを結婚させた（婚礼は紀元前193年にラフィアで行われた。プトレマイオスは16歳、クレオパトラは10歳であった）。

これは寛大な措置として装われた。すなわち、アンティオコスは若い王の同盟者かつ「保護者」として自らを位置づけ、アジアにおける獲得地を保持しつつ平和を確保したのである。この婚姻によって、彼は娘を通してエジプトに対する間接的影響力を得たのであり（彼は、娘がセレウコス朝の出自への忠誠を保ち、プトレマイオス朝の宮廷において親シリア的な発言力として行動することを期待していた）、この策略は裏目に出た。というのも、クレオパトラは父ではなく、夫とエジプトの側に立ち、アンティオコスの長期的支配を損なったからである。これはブルンディシウム協定（紀元前40年）を想起させ、また幾つかの点でローマの出来事とも関連していた。

アントニウスが、戦争寸前にまで至った後、対立する勢力を結び合わせるためにオクタウィア（オクタウィアヌスの姉妹）と結婚したのと同様に、アンティオコスは、自らの娘をプトレマイオス五世に嫁がせることによって、一時的な和平と領土分割（セレウコス朝は北方における征服地を保持し、プトレマイオスは南方のエジプトを保持した）を正式なものとした。

アンティオコスは、幼い王プトレマイオス五世に対して、（家族関係を通じて）事実上の後見人として行動したが、それは、オクタウィアヌス（および第二回三頭政治）が権力の空白や対立のただ中であって自らの立場を築いたあり方に類似している。いずれの場合にも、「より強い」人物（アンティオコス／オクタウィアヌス）は、親族関係を通して脆弱な相手に対する影響力を得ようとした。両者の取り決めは短期的には安定をもたらしたが、根底に不信があったため、長期的には「成功しなかった」—クレオパトラはエジプトを支持し（それによってアンティオコスを撃肘し）、一方、アントニウスの東方志向（クレオパトラ七世）によって、オクタウィアヌスとの関係は破綻に至った。

摂政のもとに置かれたプトレマイオス五世の幼少期は、ユリウス・カエサルの死後に生じた不安定な情勢（それが三頭政治の成立と権力闘争へとつながった）に対応している。ベレニケがアンティオコスと結婚したことは、ダニエル書第十一章におけるセレウコス帝国の歴史の始まりを画し、またアンティオコス大王の娘がエジプトの幼い王と結婚したことは、セレウコス帝国の終焉を画した。マルク・アントニウスとオクタウィアとの結婚の終結は、プトレマイオス王国の終焉を画した。神の契約の民としてのユダの終焉は十字架において生じ、そのユダヤの王国はマカバイ家と、彼らがローマと結んだ同盟によって始まった。これらすべての預言的系統は、ダニエル書第十一章の叙述の中に表されており、しかもそれらはすべて第四十節の隠された歴史と一致している。第五節において、ベレニケの条約が現れ、それがアンティオコス大王と、その娘クレオパトラ・シュラの条約へと導き、このことは第二十三節のマカバイ家の歴史において生起する。マカバイ家は、セレウコス王朝の末期に属する者の一人であったアンティオコス・エピファネスに対する彼らの反乱に基づいて、この系統の一部となる。

アンティオコス・エピファネスとは、第六次シリア戦争の最中、紀元前168年にアレクサンドリア近郊のエジプトにいたアンティオコスのことである。アンティオコス・エピファネスはエジプトに侵攻し、まさにアレクサンドリアを攻略しようとしていた。プトレマイオス朝の支配者たちはローマに援助を求めた。ローマはポピリウス・ラエナスを派遣し（従う者はごく少数で、軍隊は伴っていなかった）、元老院からの最後通牒を伝えさせた。すなわち、アンティオコスはただちにエジプトおよびキプロスから撤退しなければならず、さもなければローマとの戦争に直面する、というものであった。アンティオコスはその書簡を受け取り、顧問たちと協議する時間を求めたが、厳格で高圧的であったと描写されるポピリウスは、自らの杖を取り、王の足もとの周囲の砂の上に円を描いた。そして彼は、「その円の外へ一歩でも出る前に、元老院に持ち帰るべき返答を私に与えよ」と宣言した。

その含意は明白であった。アンティオコスは、ローマの要求を受け入れることを約さずしてその円の外へ出ることはできず、合意なしにそれを越えることは戦争を意味した。驚愕し屈辱を受けたアンティオコスは、しばしの間ためらったが、やがてこれに従うことに同意し、エジプトからその軍勢を撤退させ、シリアへ帰還した。この大胆な外交上の行為（ローマの増大しつつあった武力の声望に支えられていた）は、戦闘を交えることなく撤退を強い、東地中海におけるローマの台頭しつつある覇権を示した。これはしばしば“drawing a line in the sand”という句の起源として引かれる（もっとも、文字どおりには線ではなく円であった）。

アンティオコス・エピファネスはまた、ダニエル書第十一章十四節において自らを高め、倒れ、そしてその幻を確立する力として、プロテスタントの理解の対象ともなった。

その時、多くの者が南の王に敵して立ち上がり、また、あなたの民の中の暴虐の者たちも、自らを高くしてその幻を成就しようとするが、彼らは倒れる。ダニエル11:14。

アンティオコス四世エピファネスは紀元前175年から164年まで統治し、セレウコス朝の十三人の王のうち第八代であった。彼はヘレニズム文化を強制し、ギリシアの宗教的慣行の下に帝国を統一しようとした。彼は紀元前169年に神殿を略奪し、ユダヤ人の慣行（割

礼、安息日の遵守、律法の学習)を禁じ、異教の神々への犠牲を強要した。紀元前167年12月、彼は神殿においてユダヤ人の燔祭の祭壇の上に異教の祭壇(ゼウスのためのもの)を築き、その上で豚をいけにえとして献げ、さらに他の冒瀆的な行為をも行った。この冒瀆は、敬虔なユダヤ人たちにとって最後の一線であり、彼らはこれを神殿の神聖さと神の律法に対する究極の侵犯と見なした。これをきっかけに、マテアス(モデインの祭司)が異教の神々に犠牲を献げよというセレウコス朝の役人の命令を拒み、背教したユダヤ人とその役人を殺し、その後、自分の息子たち(後のマカバイたち)とともに山地へ逃れたとき、ただちに抵抗運動が引き起こされた。これによって、ユダヤ人の礼拝を回復することを目的とした、紀元前167年から160年に及ぶゲリラ戦と反乱に火がつけられ、最終的に紀元前164年、ユダ・マカベウスの下で神殿の再奉献(ハヌカー)へと至った。

セレウコス朝の初めと終わりには、東西、あるいは南北の分割という要素を有する、外交的結婚によって表された重要な条約が存在した。セレウコス朝が衰退するにつれて、アンティオコス・エピファネスは台頭しつつあるローマの勢力の象徴となり、またマカバイ人の憤りの焦点となる。後の歴史において、彼はその幻を確立する預言的象徴の偽造となる。第十一章二十二節の勢力は、契約の君が砕かれた時に砕かれる。

洪水のような軍勢は彼の前から押し流されて砕かれ、契約の君もまた同様である。ダニエル11:22。

アンティオコス・エピファネスの統治は紀元前164年に終わったが、それは「契約の君」が十字架において「砕かれた」キリストの時よりほぼ二百年前のことであった。ここで私たちが注目したいのは、セレウコス帝国が、その両当事者の間の欺きが歴史的記録の事項となっている、外交的条約結婚をもって始まり、また終わったということである。アンティオコス・エピファネスの治世の間に、アメリカ独立革命を予表したマカベアの反乱が始まった。マカベア家の歴史において、セレウコスの支配を振り払おうとする彼らの闘争には、ローマとの重要な条約が含まれていた。その条約を直接示すその節は、ローマが欺瞞をもって、すなわち条約の席において偽りを語りつつ行動したことを、明確に示している。

彼と同盟を結んだ後、彼は欺きをもって事を行う。すなわち、彼は上って来て、少数の民によって強くなる。ダニエル 11:23。

第四十節における終わりの時に先行する、すべての預言的系統には、破られた条約が含まれている。ウライア・スミスは、第三十節の「聖なる契約を捨つる者ども」について注解して、次のように記している。

「『契約に対する憤り』とは、すなわち聖書、契約の書のことである。この種の革命はローマにおいて成し遂げられた。ローマを征服したヘルリ族、ゴート族、ヴァンダル族は、アリウス派の信仰を受け入れ、カトリック教会の敵となった。ユスティニアヌスが教皇を教会の首長、また異端者の矯正者であると布告したのは、とりわけこの異端を根絶する目的のためであった。ほどなくして聖書は、一般民衆が読んではいない危険な書物と見なされるようになり、争点となるすべての問題は教皇に付託されるべきものとされた。このようにして神の御言葉の上に辱めが積み重ねられた。そして

、なお存続していたその東方分裂のローマ皇帝たちは、契約を捨てて大背教を構成したローマ教会と通じ、あるいはこれに黙認を与え、『異端』を鎮圧する目的をもっていた。罪の人は、そのときローマを支配していたアリウス派のゴート族が西暦538年に敗北したことによって、その僭越な王座へと押し上げられた。」ユライア・スミス『Daniel and the Revelation』281頁。

ダニエル書第十一章第五節は、南の王が外交的花嫁を提供する歴史の系譜を示しており、それは後に北の王によって破られる条約の象徴である。南の王の報復は、1798年において、ナポレオンの霊的な南の王が教皇制の北の王に対して行った報復を予表していた。第五節から第九節までの破られた条約は、ナポレオンの破られたトレンティーノ条約を予表しており、それはさらに、NATOによって条約が破られたというプーチンの主張を予表していた。ナポレオンの報復は、2014年におけるウクライナに対するプーチンの報復を予表していた。第十節において第四次シリア戦争を終結させたアンティオコス大王の報復は、1798年のナポレオン、また2014年のプーチンとも一致している。紀元前200年の第十五節のパニウムの戦いに続いて、アンティオコスは、地上軍の軍靴を用いることなくエジプトを自らの支配下に置くという隠された意図をもって、外交的結婚を取り決めた。アンティオコス大王の王座はその息子に継承されたが、その息子は暗殺され、それによってアンティオコス大王の末の息子であるアンティオコス・エピファネスが王座に就いた。ギリシアの慣習と宗教を実施しようとした彼の行動は、マカバイの反乱を引き起こし、それが第二十三節のローマとの欺瞞的条約へと導いた。第二十四節は異教ローマを導入し、アントニウスとアウグストゥスの偽りの食卓を示している。第三十節において、異教ローマは教皇制教会との対話に入り、その者たちは聖なる契約を破った者たちとして記されている。

二十四節から三十節までは異教ローマの証言であり、三十一節から四十節までは教皇制ローマの証言を示している。ダニエル書十一章一節から四十節に至るまでの各行はすべて、四十節の隠された歴史に適用される預言の一行を表している。セレウコス王国の系譜、プトレマイオス王国の系譜、マカバイ家によるユダヤ王国の系譜、異教ローマの系譜、そして教皇制ローマの系譜は、いずれも一九八九年から日曜法に至る歴史を例証している。それらの各系譜は、その歴史の主要な要素として破られた条約を示している。

ダニエル十一章の幻を確立するのはローマであり、また異教ローマと教皇制ローマの、欺瞞に満ちた預言的条約は、漸進的なものとして、かつそれぞれの別個の預言的期間においてローマが至上の支配を行う以前に生じたものとして示されている。両者の勢力は、それぞれ第三の障害が克服された時に、覇権の預言的期間が始まるものとしてその起点を画した。合衆国における、まもなく到来する日曜法の前に、二つの勢力の間に欺瞞的条約が存在するであろう。四度にわたり、その二つの勢力は南の王と北の王であった。すなわち、一度はユダの栄光の地とローマとの間に、一度はローマ三頭政治の二つの部分の間に、そして一度は異教ローマと教皇制ローマとの間にである。ローマに関する二つの欺瞞的条約はいずれも、東方のアントニウス、西方のアウグストゥス、あるいは東方の異教ローマと西方の教皇制ローマというように、ローマ帝国の一方の半分と他方の半分との間の条約であった。北の王と南の王との間の欺瞞的条約は四つ、東の王と西の王との間のものは二つ、そして、やがて北の王となる者と栄光の地との間のものは一つである。

以上をもって、ダニエル書に関する私たちの最初の提示を終える。パニウムの一連の考察は、ダニエル書に関する連続講解の結びを成すものであり、それは第四十節の隠された歴史への序論であって、私たちは次の記事において引き続きこれを考察していく。